

1. 「個別最適化された学び」と協働的な学び」を推進するための副校長・教頭の役割

「個別最適化された学び」と協働的な学び」の文言を耳にするたびに、ある管理職からの質問を思い出します。

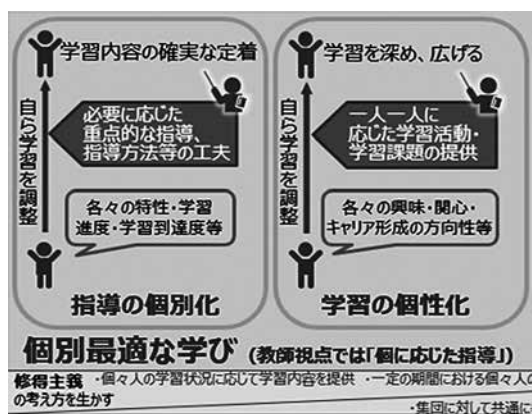
「中教審はこのたび『個別最適化された学びと協働的な学び』について提言しましたね。ということは、学校はこれから『主体的・対話的で深い学び』より『個別最適化された学びと協働的な学び』に重点を移せということですね」

これには、「いえ違います。『個別最適化された学びと協働的な学び』を意識することで、『主体的・対話的で深い学び』をより推進することができますと考えてください。『主体的・対話的で深い学び』の方針は揺らいでいません」と助言しました。同時に、学校現場が「個別最適化された学びと協働的な学び」を正しく理解するために、講演時などその意義を丁寧に伝えなければいけないと肝に銘じました。

2. 「個別最適化された学び」と「個別最適化された学び」

ここからは、副校長・教頭の皆さんに講演させていただいているつもりで綴りたいと思います。

まず、「個別最適化された学び」と「個別最適化された学び」の違いを考えてください。文部科学省の文書を見ると、以前は「個別最適化された学び」と表現されていたのが、あるときから「個別最適化された学び」という表現に変えられています。ここに重



「主体的・対話的で深い学び」を 生み出すための指導・助言

岐阜聖徳学園大学教育学部 教授 玉置 崇



要な違いがあります。それを簡単に言えば、「個別最適化された学び」は「教師が主体」「個別最適化された学び」は「子どもが主体」です。この違いが、「個別最適化された学び」の図に示された「自ら学習を調整」という文言と強く関係します。

副校長・教頭として、「個別最適化された学び」を教職員に伝える際には、「自ら学習を調整」という文言の強調が必要です。子ども自身が自らを振り返り、学習が不十分なところやさらに深めたいところを子ども自身が決めて進めていくことを重要視していることが、この「自ら学習を調整」という文言に集約されているからです。

私は次のように話して、「自ら学習を調整」というイメージを持ってもらうようにしています。

「○先生とずっと一緒に勉強したいという子どもがいるでしょう。しかし、教師はその子どもからいつかは離れてしまいます。先生がいなくなっても、自らを振り返り、自身の次の学びを決めていくことができる子どもを育てることが大切なのです。それが『自ら学習を調整』という文言なのです」

3. 一人一台端末活用を踏まえた「個別最適化された学び」

中教審等が提示した「指導の個別化」「学習の個性化」に関する文言をよく見ると、一人一台情報端末活用を踏まえていることに留意すべきです。副校長・教頭は、GIGAスクール構想を推進する立場ですので、このことも踏まえておくべきです。

(1) 指導の個別化

学習内容の確実な定着を目指して行われることが多い。どうしても身に付けなければならない学習内容について、それぞれの理解度やペース、学びやすい方法などに応じて、場合によっては教師の助言をもらいながら進めていく学習のこと。大切なことは、

子ども自身がどのように学びを進めていくかを決めていくこと。これを「自ら学習を調整」と表記。

それぞれの進度が異なるので、一人一人に合わせた学習を先生一人で管理するのは大変だが、(A) 端末を活用すればクラウド上で子どもたちの進度を確認することが可能となる。(記号・傍線筆者)

(2) 学習の個性化

子どもたちが「何を学びたいか」「何を深めたいか」「何を広げていきたいか」など、一人一人が違う課題意識をもって、多様な調べ方で自分の課題を解決していく学習。(B) 違う課題意識をもっている、それに対するアプローチや学び方は一人一人違う。調べる内容や調べ方が違ってくるかもしれない。インタビュ―したいと思う子どももいれば、ネットで調べたいと思う子どもがいるかもしれない。図書館へ行きたいという子どももいるかもしれない。

「自ら学習を調整」することがポイント。つまり、どんな課題に向かっただのように課題解決していくのか、その学習過程は子どもたちが決めていくということ。(記号・傍線筆者)

子どもたち一人一人が情報端末を使って、自分のペースでクラウド上のデジタルドリルで学習を進めているとします。教師がその状況を把握する時に、一人一人の端末を見ることなく、クラウド上で全ての子どもの状況が一覧できるということが(A)で述べられています。(B)については、一人一人のアプローチや学び方の違いに対応するために、一人一台情報端末を大いに活用している姿が浮かぶでしょうか。

「個別最適な学び」を進める上で、一人一台情報端末活用は有効であることを、副校長・教頭の立場で伝えていただきたいと思います。

〈連載テーマ①〉

「Society5.0時代の学校教育」

4. 「協働的な学び」を推進するために

中教審等は、この図を示し、次のような文言(筆者一部改変)で「協働的な学び」を示しています。

・一人一人が少しずつ違うテーマで学んでいく際に、学習者が孤立しないようにすることが大切。

・それぞれが学んでいることを、お互いに参照し合い、俯瞰的に見てもらったり、助けってもらったりすることが必要。求められるのが「協働的な学び」

・一人一人が考えていること、学んでいることは少しずつ違うが、お互いが参照し合い、啓発し合うことによって学びを深めたい。

・「あの人のやり方すごいな、私もあのようになりたい」「あの人の学んでいる通りに私もやってみようかな」というように、相互に啓発し合うために、一人一台情報端末を活用してクラウド上で子どもの学習状況を可視化したい。

「協働的な学び」においても、一人一台情報端末とクラウドが登場していることに注目しておくといでしょう。副校長・教頭には、「個別最適な学びと協働的な学び」を推進するために、「一人一台情報端末活用」を外すことはできないと認識して、自校の授業改善の助言をしたり、環境整備をしたりする役割が求められているのです。

